

◆【全訳】

「われわれは他人と比べることによってではなく、自分自身と比べることによって成長すべきである」——とモンテーニュは言った。

人が現代社会をより注意深く見つめ、より野心的になるほど、かつて進歩と称えられた比較が、不幸の種となってしまったことがいっそう明らかになる。それは、人が確信していながら、同時にそれによって欺かれている幻想のひとつにほかならない。私たちは SNS の成功の姿を見ては無言の競争を感じ、見えない失敗におびえ、不安を募らせる。やがて他人の期待という見えない檻の中に自らを閉じこめ、他人の承認を自らの価値と錯覚してしまう。

モンテーニュは、知恵とは他人を打ち負かすことではなく、自分自身との静かな対話にあると考えた。真の成長とは、他人に勝つことではなく、自らの弱さを克服することにある。そしてその静けさの中で、人は嫉妬から自由になるのだ。

ルソーもまた、自由とは社会的地位ではなく内なる状態であると考えた。彼は自然な自己愛と、比較から生まれる虚栄心とを区別した。

人が他人と自分を比べ始める、その欺くような瞬間だけが墮落を示すのではない。彼を墮落させるのは、他人に勝つことでしか自分の価値を測れなくする、心の静かな専制——永続する欲望でもある。

モンテーニュとルソーはともに教えている。比較をやめること——それは無関心ではなく、知恵の最初の一步なのだ。

◆ Q1.

(1)

The more closely one looks at modern society and the more ambitious one becomes, the more evident it becomes that comparison, once praised as progress, has become the seed of misery, among the illusions of which one is sure yet by which one is deceived.

和訳

人が現代社会をより注意深く見つめ、より野心的になるほど、かつて進歩と称えられた比較が、不幸の種となってしまったことがいっそう明らかになる。—それは、人が確信していながらも、同時にそれによって欺かれている幻想のひとつにほかならない。

解説(文法的)

・The more ..., the more ...: 二重比較の倒置構文。「～すればするほど、いっそう～になる」。

・once praised as progress: 過去分詞の後置修飾。「かつて進歩として称えられた」。

・among the illusions of which one is sure yet by which one is deceived: 前置詞+関係詞構文。

- of which: be sure of ~「～を確信している」

- by which: be deceived by ~「～に欺かれる」

→「人が確信していながらも、それによって欺かれている幻想の中に」

・文全体で、モンテーニュの洞察を「比較=幻想」という比喩で描いている。

【構文解説】

「it becomes evident that～」は形式主語構文で「～ということが明らかになる」。

that 節の中の「once praised as progress」は過去分詞の後置修飾で、「かつて進歩として称えられた」。

後半の「among the illusions of which one is sure yet by which one is deceived」は、前置詞＋関係代名詞構文である。

「be sure of ～(～を確信している)」「be deceived by ～(～に欺かれる)」の二つを対比させ、

「人が確信していながら、その同じものに欺かれる幻想の中に」という逆説を作っている。

◆ Q2.

(2)

It is not just the moment, that deceptive point at which man begins to compare himself with others, that marks his fall, but also the enduring desire, that silent tyranny of the heart, which makes him measure his worth only by surpassing others.

和訳

人が他人と自分を比べ始める、その欺くような瞬間だけが墮落を示すのではない。彼を墮落させるのは、他人に勝つことでしか自分の価値を測れなくする、心の静かな専制—永続する欲望でもある。

解説(文法的)

・It is not just A but also B:対比構文。

「AだけでなくBもまた～である」。

・the moment, that deceptive point at which…:同格構文。「人が他人と比べ始める欺くような瞬間」。

・that marks his fall:主節の述語。「彼の墮落を示す」。

・the enduring desire, that silent tyranny of the heart:同格句。「心の静かな専制とも言うべき永続する欲望」。

・which makes him measure his worth only by surpassing others:関係詞節。「他人を超えることでしか自らの価値を測れなくする」。

→「墮落」は瞬間的な行為ではなく、持続的な欲望の中にあるという哲学的対比を示す。

【構文解説】

「It is not just A but also B that SV」は「SVするのはAだけでなくBでもある」という対比構文。

A部分の「the moment, that deceptive point at which…」は同格構文で、「人が他人と比べ始める欺くような瞬間」。

B部分の「the enduring desire, that silent tyranny of the heart」も同格構文で、「心の静かな専制ともいえる永続的欲望」。

関係代名詞節「which makes him measure his worth only by surpassing others」はBを修飾し、「他人に勝つことでしか自分の価値を測れなくする」と具体化している。

◆ Q3.

According to the essay, what do Montaigne and Rousseau have in common in their views on human freedom and self-growth?

【模範解答 1】

Both philosophers believed that true freedom comes from inner discipline, not from social comparison or recognition. They saw self-

mastery—not superiority—as the path to peace and virtue.

【和訳】

両哲学者は、真の自由とは他人との比較や承認からではなく、内なる自己統御から生まれると考えていた。彼らにとって、平和と徳への道は「他者への優越」ではなく「自己の統御」であった。

【模範解答 2(別解)】

Montaigne and Rousseau both taught that comparing oneself with others destroys peace of mind. They emphasized harmony within the self, arguing that only those who rule their hearts can be truly free.

【和訳】

モンテーニュとルソーはいずれも、他人との比較が心の平和を壊すと説いた。彼らは内面的調和の重要性を強調し、自らの心を支配できる者こそ真に自由であると主張した。

【解説】

この設問の主旨は、「モンテーニュとルソーの思想の共通点」を、自由(freedom)と自己成長(self-growth)という観点からまとめることにある。

本文では、両者の哲学が「他人との比較を否定し、内面的な秩序と対話を重視する」という一点で一致していることが示されている。

---

#### ① モンテーニュの立場

モンテーニュは『エッセー』において、人間の成長とは「他人を基準にして評価されるもの」ではなく、「自己との対話によって深まるもの」であると述べた。本文の中では、“wisdom lies not in outshining others but in quiet dialogue with one’s own mind.”という

文がこれを象徴している。ここでの *outshining others* (他人に勝つこと) と *quiet dialogue* (静かな自己対話) という対比が、モンテーニュの核心思想——「他人ではなく自己との比較」を明確に示している。彼にとって真の知恵とは、外的な競争心ではなく、内的な静けさ (calmness) と規律 (discipline) を保つことにあった。

---

#### ② ルソーの立場

ルソーは『人間不平等起源論』で、人間の墮落は「他人との比較」から始まると主張した。本文では、“He distinguished amour de soi — a natural love of self — from amour-propre, the vanity born of comparison.”と述べられており、ここでの区別が重要である。

- *amour de soi*: 自然な自己愛(生存・幸福を求める健全な感情)
- *amour-propre*: 他人との比較・優越心から生まれる虚栄心

ルソーは後者が人を不幸にするとし、真の自由は「他人の評価に依存しない心の状態」にあると考えた。

この点で、ルソーの「内的自由」はモンテーニュの「自己統御」と思想的に重なっている。

---

#### ③ 両者の共通点(要約)

以上の二人の思想に共通するのは、自由を「外的条件」ではなく「内的状態」として捉える姿勢である。

どちらも「他人との比較(comparison)」を人間の不幸の根源とし、

- モンテーニュは「自己との対話」
  - ルソーは「自然な自己愛」
- を通して、人間が自らの内面を支配すること

(self-mastery)こそが幸福への道であると説いた。この点を英語で表現する場合は、以下のようなキーワードを使うと自然である。  
*inner discipline / self-mastery / harmony within the self / freedom as an inner state*

これらを組み合わせることで、哲学的な精度と英語表現の格調の両方を保てる。

#### ④ 評価の観点(採点者コメント例)

・単に“Both valued freedom”のような一般的回答では不十分。

・「比較をやめること=内的自由への道」という論理関係を明確に述べられているかが鍵。

・キーワード *self-mastery, inner harmony, amour de soi, not comparison but reflection* などを含むと高評価。

・2文構成(共通点の提示+理由づけ)が理想。

#### ⑤ 参考まとめ文(高得点用表現例)

Both Montaigne and Rousseau saw true freedom as an inner condition achieved through self-mastery.

They rejected social comparison as the source of misery and taught that peace comes only from harmony within the self.

この二文で、内的自由／比較の否定／平和の回復という三要素を網羅しており、

C1(英検1級～難関大入試)レベルの完成度を備えている。

◆ Q4. Personal Writing | 自己省察型  
(内容連動)

Question:

The author argues that true wisdom begins when we stop comparing ourselves with others.

Do you agree or disagree? Explain your opinion with one or two concrete examples from your own experience or observation.

(Write about 80-100 words.)

#### ♥ Model Answer 1(97語)

I completely agree that wisdom begins when we stop comparing. In high school, I used to envy a friend who always scored higher than me. But once I began to focus on my own progress—reading a bit more, studying a bit longer—I felt calm instead of anxious. Comparison gave me pressure; reflection gave me peace. Now I believe that success is not being above others but being better than yesterday's self, and that quiet confidence is the truest freedom.

【和訳】

私は、他人との比較をやめたときに知恵が始まるという考えに全面的に賛成する。高校時代、私はいつも自分より成績の良い友人を羨んでいた。だが自分自身の進歩——昨日より少し多く読み、少し長く学ぶこと——に集中し始めると、不安ではなく落ち着きを感じるようになった。比較は私に圧力を与え、内省は平和を与えた。今では、成功とは他人より上に立つことではなく、昨日の自分を超越することだと

信じている。そして、その静かな自信こそが真の自由である。

【文法・表現解説】

・I completely agree that …:that 節名詞構文。「～という意見に全面的に賛成する」。

・used to envy:「以前は～を羨んでいた」。過去の習慣。

・focus on my own progress:「自分の進歩に集中する」。

・Comparison gave me pressure; reflection gave me peace.:倒置的対比構文。

・being better than yesterday's self:動名詞＋比較級句。「昨日の自分より良くあること」。

・哲学的締め:quiet confidence is the truest freedom.

---

♥ Model Answer 2(100 語)

I partly agree. Comparison itself is not always evil; it can show us direction. When I saw a classmate speak English fluently, I first felt inferior, but then motivated to practice every day. Still, I learned that comparison helps only when used for growth, not for pride. If we compare to learn, it enlightens us; if we compare to compete, it enslaves us. So, the key is to turn comparison into reflection—measuring not superiority but sincerity—and that shift, I believe, is the beginning of wisdom.

【和訳】

私は部分的に賛成だ。比較そのものが常に悪いわけではなく、進むべき方向を示してくれることもある。英語を流暢に話すクラスメートを見たとき、私は最初こそ劣等感を覚えたが、やがて毎日練習する動機になった。しかし、比較は誇りのためではなく成長のために用いられるときにのみ助けとなると学んだ。学ぶために比べれば人を照らし、競うために比べれば人を縛る。だから大切なのは、比較を反省へと変えること——優越ではなく誠実を尺度とすること——であり、その転換こそ知恵の始まりだと私は信じている。

【文法・表現解説】

・partly agree:「部分的に賛成する」。

・Comparison itself is not always evil:主語強調の倒置的表現。

・inferior / motivated:心理変化の形容詞。

・If we compare to learn … if we compare to compete …:対照的仮定法。

・turn A into B:「A を B に変える」。

・measuring not superiority but sincerity:対比構文(not A but B)。

・that shift … is the beginning of wisdom:主題の再確認・哲学的結語。